

## 4 研究分野について

古典学の発祥は古く、古典伝承の厳密を期するための学問としては、近代古典学の基となった紀元前3世紀以来のアレキサンドリアの古典ギリシャ文献学はもとより、例えばインドには紀元前5世紀以来、ヴェーダ補助学があり、中国には漢代以来、経書の解釈学があった。これらはある種の精密さで近代文献学に比肩するものであり、それぞれの分野における近代古典学に相応の影響を与えている。

このように同じ文献学という手法を用いながら、近代古典学の形態は文明ごとに特色を持っている。この点からも、本特定領域研究のめざす諸領域の交流は、豊かな新知見をもたらすと予測される。

以下には、主要文明における古典学の起源と伝統、および現在の国内外の状況を概観し、それぞれの研究分野において、現在どの種の研究が求められているかを展望する。

### 1 .日本学

分野責任者 木田章義

日本の古典に関する研究は、どの分野であれ、やはり日本国内での研究がもっとも進んでいる。研究者の数も多く、研究の量も圧倒的で、質も高い。分野の細分化も行われ、どの分野にも優秀な研究者がいる。これまであまり注目されなかった資料類も公刊されるようになってきている。ただ、中国文化の影響に関する研究は、最近盛んになってきた分野で、優秀な若手研究者によって精力的に進められているが、まだ他の研究に比較して量は不足する。

日本文学では、室町時代の五山文学の研究とキリシタン文学の研究があまり進んでいない。五山文学は中国の宋・元代の文学との関連が深く、この時代の中国文学を理解することは国文学者には大変難しいこと、キリシタン文献についてはラテン語・ポルトガル語・スペイン語などの言語を習得する必要があって、やはり大きな負担であるからである。この二つのテーマは日本の日本文学研究の中で補わねばならない部分である。

日本の仏教思想についての研究も多くの蓄積があるが、広範な仏教の伝流地域の中で日本仏教がどのような位置にあるのか、どのような特色を持っているのかなどという点については、まだ十分に研究されているとは言えな

い。

日本の政治体制を含めた歴史についても、古くから多くの成果が積み上げられているが、個々の重要な点、たとえば、奈良時代に唐の律令を受け入れた際の日本的変容の問題などはまだ綿密には行われておらず、これからの研究に待つべきところである。

国外の研究については、日本文化に対する興味を持つ人間は多くなってはいるが、日本語のレベルの高い研究者の数が少なく、全体的に低調である。

### 2 .中国学

分野責任者 興膳 宏

中国の典籍は、少なくとも前漢末以来、国家的な事業として管理、保存が継続的になされてきた。『漢書』芸文志に始まって、『四庫全書』編纂に至る龐大な典籍の整理と詳細な目録作成には、典籍を中国文化の精華そのものと見なす伝統的な考えがよく示されている。四部に分類される中国古典のうち、第一の経部に属する経書、すなわち儒家の典籍には、漢代以来の学者により、経典の解釈をめぐる、嘗々として注釈の業績が堆積されて

きた。こうした著作には、儒教が中国の国家存立の基盤をなす思想とされてきたことによるドグマを免れないところも大きい。清朝になると、古代言語の精密な研究が発展したことにより、経書を通じての緻密な古代研究が推進されるようになった。

第二の史部の書、つまり広義の歴史書は、最初は経書の一部をなす分野にすぎなかったが、史実の記録を重んずる中国文化の伝統に沿って、やがて巨大な流れを形成し、中国の典籍全体の中で、集部の書と並んで最も多くの量を占めるに至った。第三の子部の書は、先秦の諸子の書を主要な柱として設けられた部類であるが、道家以外の諸子の書は必要に応じて儒家思想に組み込まれてしまったこともあって、一部の書を除いて、当初の子部の学問は衰退した。ただし、子部の一部をなす医学・技術など自然科学系の書は、新陳代謝をくり返しながらい貫して増殖していった。第四の集部は、個人の詩文集を基本とする広い意味での文学書であるが、詩文の創作が中国の知識人の不可欠の教養とされたことから、歴代にわたって多くの書が生み出された。その中には、唐詩のように、今日なお広く愛好されている作品も少なくない。

近代になって、西洋の学術・文化との接触がなされるとともに、中国古典の継承や研究にも大きな変化が生じた。まず、儒教という権威の枠組みから自由な立場で古典を位置づけることが可能になった。旧社会では不当におとめられてきた、小説のような白話による文学の価値が認められるようになったのは、その具体的な表われである。資料の面でも、二〇世紀初頭の敦煌文献の発見に代表されるような、版本以前の新資料が出現したことにより、古典の領域が拡大するとともに、古来のテキストそのものを再検討することも必要になった。人民共和国になってからも、馬王堆帛書を典型とする新資料の発見と紹介はなおつづいており、古典研究はいま大きな転機にさしかかっている。また旧来、古典は中国の民族遺産とする姿勢が中国人研究者の間では普遍的であったが、近年ではむしろ世界文化の中での中国古典の位置づけを意識した考えが有力になってきており、グローバルな視野の中での研究に道を開くものといえよう。

わが国では、江戸時代までの近代以前において、長い中国古典の受容と研究の歴史があり、近代になってからは、その伝統を受け継ぐ一方で、清朝考証学やヨーロッパ東洋学の方法にも学びつつ、新しい時代の古典研究が進められて、今日に至っている。中国古典研究を支える

日本人の中国古典に対する教養は、全般的に低下してきている事実は否めないが、研究者の層も中国以外では最も厚く、専門性という点から見ても、現在なお世界的に高い水準を維持しているのは事実である。

戦後五十年の中国古典研究は、戦前の「漢学」からの脱皮によって再生を果たした。古い道徳臭がつきまとう「漢学」を離れた研究は、おのずから多様な形での発展を遂げ、対象とする領域も広まった。関連する他領域との交流が活発さを加え、また学際化の進行してゆく状況の中で、この傾向はこれからもさらに強まってゆくであろう。しかし、「漢学」の伝統の中で培われた深く精密な読書力は、現代の研究者がむしろ積極的に追求すべきものであって、その意味では、我々が過去に学ぶことはまだ決して少なくないといえる。さらに、中国との将来にわたる長い関係や、中国文化の日本への浸透の深さという面からしても、中国古典研究が学外の社会にも情報を発信しつづける責務のあることを、研究者は常に自覚しておかねばならない。伝統の成果を生かしつつ、さまざまな斬新な魅力を備えた中国古典研究がいま求められている。

### 3 チベット学

分野責任者 御牧克己

チベット古典は、大きく分けて仏教聖典とボン教聖典に大別することが出来る。

仏教は、7世紀のソンツェン・ガンボ王時代に中国とネパールから伝来したのが最初であるが、チソンデツェン王時代の8世紀末にインド仏教がチベット仏教の正統と認められて以来、インドから組織的に導入された。チベット仏典は、主としてサンスクリットから翻訳された「大蔵経」と、チベット人の著作である「蔵外文献」から成り、また前者は「カンギユル」(経典の翻訳)と「テンギユル」(論書の翻訳)に分けられる。9世紀初頭に編纂された『翻訳名義大集』はサンスクリットとチベット語を併記する語彙集であり、仏典翻訳に当たって訳語

統一を図ったものである。「大蔵経」は、14世紀初頭に今日の形に編纂され、15世紀初頭には木版本として刊行され、ことに17世紀以降続々と開版された。一方、それらの版本と並んで写本で伝えられた「大蔵経」もかなりの数が存在し、その重要性は無視することは出来ない。

ボン教は、チベット土着宗教と考えられる古い時代の「古ボン教」と、11世紀以降に仏教の影響を受けて組織化される「新ボン教」とに分けられる。「古ボン教」は敦煌文書より明らかになるように、生者と死者の仲介のシャーマン的な役割を演じていた。一方、「新ボン教」には、仏教と同じように、「カンギュル」と「テンギュル」が存在（但し、テンギュルの綴り字は仏教のそれと少し異なる）し、写本、版本の数種類が確認されているが、膨大な文献群は大部分が未研究のまま残されている。

ヨーロッパには13世紀以来、神父や修道士のチベット報告が届いていたが、チベット学の基礎を築いたのは、19世紀前半に出たハンガリー人研究者チョーマ・ド・ケレスである。その後フランス、イタリアを中心に、ロシア、ドイツ、オーストリア、イギリス、ノルウェーなどで質の高い研究が継続されて今日に至っている。日本にも少数であるが高水準の研究がある。

公募研究としては、「大蔵経」「蔵外文献」を問わず、仏教、ボン教を問わず、また、哲学、歴史、文学のジャンルを問わず、「古典学の再構築」の趣旨に合致した、チベット学の文献学的にレベルが高く、かつ、ユニークな発想の研究を求めます。

## 4 インド学

分野責任者 江島恵教  
文責 中谷英明・高橋孝信

インド古典として最古にして最も重要な『リグ・ヴェーダ』は、紀元前18世紀に遡る。その後『ヤジュル・ヴェーダ』、『サーマ・ヴェーダ』が、また紀元前12世紀には呪術的色彩の強い『アタルヴァ・ヴェーダ』が編纂された。祭官（バラモン）が祭祀に用いたこれら宗教文典

に対する文献学的研究は、紀元前10世紀頃から成立し始めたブラーフマナ文献の「釈義」にその萌芽を認め得よう。紀元前6、7世紀頃からは、「ヴェーダ補助学」と称される「音韻論」、「総索引」、「語源論」、「韻律論」、「文法」の制作が始まった。これらは「ヴェーダの正確な伝承を保証する」という宗教的動機に基づき、記述は時に神学的思弁と渾然として、客観的、科学的態度と乖離する部分もあるが、紀元前4、5世紀のパーニニの「文法」は、近代の言語学者によって「かつて存在した最も完璧な記述文法」と評価されるほどの高水準に達した。「音韻論」、「文法」は、18世紀におけるヨーロッパ人によるこれらの発見が、近代音韻学、記述言語学、比較言語学成立の直接誘因となったという輝かしい経緯を有する。

これら祭祀聖典にせよ、西紀前後から民衆に膾炙した『マハーバーラタ』、『ラーマヤナ』等の叙事詩にせよ、さらには哲学論書やその他の文献を含め、インド古典の第1の特徴は、中世末期に至るまで書写されることなく、その後も主として口承されたことである。インド古典文献学は、この事実を踏まえ、音韻・韻律研究にも力を注ぐ。第2の特徴は、成立年代未詳の文献が多く、また数世紀にわたる幾多の層から成る典籍も少なくないことである。しかしごく近年の研究は、徐々に相対、絶対年代を確定しつつある。

19世紀にヨーロッパで確立したインド古典文献学は、その後、北米、日本にも講座が設けられ、今日ではこれら3地域を中心に継承される。我が国においては、大蔵経目録作成（『南条目録』1883）や『大正新脩大蔵経』刊行（1921）など、漢訳仏典研究にたいする貢献が早くからなされた。サンスクリット原典研究は、平安朝以来の悉曇学が文字と音価の研究に留まり、明治以降は衰微したのに対し、明治末年以降、ヨーロッパ留学生の帰朝とともに近代的研究が盛んとなり、戦後は会員2、300人を擁する日本印度学仏教学会を中心として、欧米に比肩し、さらに近年はそれを凌ぐ研究も現れている。

以上は、インド・アーリア系文献に関してであるが、南インドには、言語系統を異にするドラヴィダ系文献が残る。これらの研究は、15世紀末、ヨーロッパ人が南インドに進出するや、主に宣教師達の手によって着手された。18世紀末になるとドラヴィダ諸語の発見が始まり、1856年、ドラヴィダ語族と命名され、ドラヴィダ言語学が確立する。やがて19世紀後半、忘れ去られていたタミル古典が再発見され、今世紀初頭にかけてテキスト

が次々に出版され、近代的研究に入る。そのような中で、政府主導で『タミル語彙集成』(6巻, 1924 - 39)が編纂され、1964年には国際タミル学会も組織された。他方、古典の再発見は民族的自覚を促し、ひいては反アーリア・反バラモン運動として民族主義的色彩を強めてもいる。インド国外での研究については、植民地政策と関連して研究が促進されてきた欧州諸国では研究者がやや減ってはいるが、米国その他の地域では盛んになっている。我が国では、戦後、小数ではあるが、国際学会を先導する研究も現れ始めている。

インド的思惟は、古来より人の精神と自然とを根底において一体のものとして捉える。インド人の精神基盤となり、社会維持の根源力となってきた多数のインド古典は、このような思惟から結果する種々相を展開して見せるが、それらは、対蹠的な思惟方法の支配的な現代文明にとって、多くの新鮮な示唆に富んでいる。

## 5. イスラエル学

分野責任者 関根清三

ここでいう「イスラエル学」とは、「古代イスラエル宗教」、およびそれを継承する「ユダヤ教」(紀元前6世紀バビロン捕囚解放以後の「初期ユダヤ教」と、紀元1世紀末以降の「ラビ的ユダヤ教」)、そしてユダヤ教の一発展形態である限りにおいての「初期キリスト教」、を主たる対象とする学問の総称である。

イスラエル宗教の最も根本的な古典は、「古代イスラエル宗教」および「初期ユダヤ教」が産み出した「聖書」(キリスト教のいわゆる「旧約聖書」)である。それがどのような過程を経て成立したかを解明し、いかなる意味を伝えているかを規定することが、研究の基本となる。その中でも個々の文書の、遡源しうる限りの最古の姿の確認作業は「本文批評」と言われ、基盤的重要性を持つ。その点で、死海写本が紀元前後の時代の預言書を中心にした聖書写本を大量にもたらしたことは画期的であり、ヘブライ語聖書本文の確定に大きく寄与しつつある。既

に死海写本はCD-ROMで入手できるが、その検索等の方法の発展が期待される。「新約聖書」においても、本文批評は倦むことなくなされてきたが、同時に現在では「ナグ・ハマディ文書」、とりわけその中の「トマス福音書」(紀元2世紀中頃成立)等の発見により、「本文批評」の問題域が一層の拡大を見せている。

こうした本文研究において古代・中世の写本と並んで重要なのは、ギリシア語・ラテン語等々の古代語訳である。明治以来の伝統を誇りつつ、近年斬新な新訳によって新たな段階を迎えている、旧新約聖書の和訳の試みにも、こうした古代語訳の比較検討が積極的に取り入れられている。またそうした古代からの他言語への翻訳の存在は、聖書の思想と使信が、異なる文化圏へ浸透する際、どのように受容され、また変容されていったか、という問題への重要なサンプルを提供するはずである。

本文の校訂と並んで、旧新約聖書の研究は、19世紀からキリスト教圏を中心に歴史的批判的方法を駆使した研究として盛んになった。いわゆる「聖書学」の興隆である。これはイスラエル宗教共同体の諸伝承が、どの時代のどのような思想に起源を持ち、誰によってどのように担われ、最終的にはどのようにしてモーセ五書、預言書、諸書、福音書等となって結実し、編集されたのかという問いを、いわゆる「様式史」や「編集史」、「伝承史」や「伝統史」等々、様々な方法に基づいて研究する。今日ではそれらを土台に、様々な隣接分野にまで研究が波及し、止まるところを知らない研究活動の盛況が見られる。日本の研究も、この分野においては国際的に極めて高い水準を示していると言えるが、それぞれの方法論をより精緻に磨き上げ、またそのテキスト解釈への実際の適用の成果を積み重ねて行くこと、さらには、各方法論の相互の関連性への反省などが、常に課題となり続けるだろう。

さてイスラエル宗教における聖典形成と解釈の活動は、旧新約聖書の確定で終わることなく、さらに発展を続けた。ラビ的ユダヤ教は、聖書の啓示を基礎にして社会形成を行い、タルムードなどの法規範、ミドラシュその他の聖書解釈、そして哲学・神秘主義に至る諸領域にわたって、様々な著述を残している。これらに対する学問的研究は、19世紀のドイツで、改革を目指すユダヤ人学者によって「ユダヤ学」が成立したことで飛躍的に発展し、今世紀にはその伝統を継いで、特に合衆国とイスラエルにおいて研究の進展が著しい。ユダヤ人による研究が扱

きんでており、日本の学問的研究は遅れがちであるが、ようやくタルムードの翻訳が進められており、それを踏まえた多面的な研究が今後の課題となるだろう。

このようにイスラエル宗教の全貌が、旧新約聖書、タルムード等それぞれの分野の研究の積み重ねのうちに、徐々にではあれ解明されてきているのが、イスラエル学の現状である。それを踏まえた。今回の共同研究の課題をまとめるならば、(1)各分野においてこうした方向をさらに先へと進めるとともに、(2)分野相互の情報交換を活発にしイスラエル宗教の総合的な把握を目指すこと、また(3)今までの方向を相互に批判的に反省し、新たな方法論をも模索すること、それらを基に(4)この人類の宝の一つである古典と日本文化との新たな出会いの可能性も探ること、さらには(5)イスラエル学をめぐる日本からの何らかの国際的な発信の基地を築くこと、そしてまた(6)イスラム、西洋等諸領域の文献学・解釈学の成果との交流を通じて、共に新たな知見を開く縁とすること、等々となるであろう。

こうした様々な問題関心を共有する研究者の、積極的な参加を期待する次第である。

## 6. イスラーム学・イラン学

分野責任者 杉山正明  
文責 鎌田繁・杉山正明

現在ふつう中東と呼ばれることの多い地域は、人類史上で最も古い文明の形成地であり、その後の諸文明にたいして広く深い影響を与え、人類文明の基本型となったといっても過言でない。中東地域は、7世紀はじめのイスラームの出現をさかいに、大きく2期に分けて考えることができる。

イスラーム以前については、エジプト・メソポタミア・パレスティナをはじめ、複数の文明の中核地があったが、イラン高原を中心に中東全域におよぶ大帝国を形成したアケメネス朝(ハカーマニシュ朝)からササン朝にいたる古代イランとその文化は、人類史上でも独特の

地歩と影響力をもつ。ゾロアスター教の聖典であるアヴェスタにかかわる古典研究はもとより、宗教・思想・歴史・文学・言語・文字など、多面にわたる古代イラン文化研究は、あらゆる古典研究のなかでも有数の困難さをともなうが、欧米だけでなく日本においても研究の種はまかれており、次に述べるイスラーム時代のいわゆるイラン・イスラーム文化の研究とあわせ、屈指の古典研究の領域を形成している。

かたや、イスラーム時代については、なによりもクルアーンが古典中の古典である。クルアーンをより正確に理解する必要から、預言者ムハンマドの時代の言葉を研究する学問が生まれ、ムハンマドの生涯を明らかにし、理想的な初期のイスラーム共同体の実体を解明するために伝承や歴史の研究もはじまった。その一方、現在にまでつづくイスラームの歩みのなかで、文学・歴史・思想などさまざまな著作・作品が生まれ、その使用言語・文化圏の違いをおもな基準として、ほぼアラブ・イラン・トルコの三つに大別される研究分野が事実上で形成された。とはいっても、いずれもイスラームとクルアーンが共通の基盤にあることは変わりがなく、その広がりも中東を超えて、いまや地球規模となりつつあり、全体で人類文明の巨大な淵叢をなしているといっている。古典学としてのイスラーム学は、イスラーム諸国はもとより、ヨーロッパにおいては十字軍以降、オスマン帝国との対峙から植民地経営などの局面をとおして、長い歴史と多大の蓄積が積み重ねられてきた。欧米諸国の図書館に蔵されている写本の質と量は、長いイスラーム研究の成果のひとつであるとともに、その基礎ともなったものである。

日本におけるイスラーム研究は、戦前・戦中に多少のめばえはあったものの、第二次大戦後の、とくに1970年代以降において本格的に展開しだした。写本資料を取り扱う研究者も歴史や宗教の分野を中心に現れてきており、各種のイスラーム古典の文献学的研究もなお少数にとどまるとはいえ、校訂・翻訳・注解などに優れた業績を生み出している。さらには、日本の学術研究が頭上げた伝統と「国際発言力」をもつ中央アジア史の分野では、欧米をはるかに凌駕する文字どおりの古典研究も出現した。とはいっても、全般として見れば、日本のイスラーム古典研究の基礎力は質量とも不足しており、一般人の興味を喚起する各種古典の良質な翻訳・紹介からはじまって、日本の研究水準を押し上げる起動力となるような

本格的な古典学研究の簇生が大いに期待される。イスラーム学・イラン学にかかわる公募研究も、普及と深化の両面からもとめられるであろう。

## 7. 西洋古典学

分野責任者 内山勝利

古代ギリシャおよびラテン世界の諸著作は、古典文化の盛衰ののち、主として中世キリスト教文化を経由して近・現代に伝承されてきた。その間、文献学的な研究の歴史は、すでに紀元前にまで遡る。前3世紀から1世紀にかけてのアレクサンドリアにおける古典ギリシャ文献の収集整理と本文確定の作業、中世キリスト教修道院における古典作品の羊皮紙筆写本の作成は、著作の伝承においてとりわけ重要な契機をなすものであった。19世紀に始まる近代の古典文献学は、そうした過程をへてかろうじて伝えられた古典作品について、その伝承過程を遡及し、主に中世写本を直接の資料として、それらのうちに有力写本を求め、複数の伝承を比較勘考することによって、正しい原典の復元に努めてきた。またパピュロス学や碑文研究も、思想・文学上の若干のまとまった著作や歴史研究分野にかかわる重要な新資料をもたらした。それらの成果が西洋古典研究全体を活性化させるとともに、飛躍的な進展をとげる原動力ともなったのは、当然のことであり、西洋古典学は現代の西欧世界の文化的根幹を担い、その教養理念を支える最も大きな柱としての役割を果たしてきたのである。

我が国における西洋古典学の受容は、おおむね明治期に始まり、特に創設期の東京大学に招請されたドイツ人学者ケーベルの門下から古典ギリシャ語（およびラテン語）によるギリシャ研究が芽生え、直接間接にその流れのうちから本格的な西洋古典研究が定着していった。第二次世界大戦後の昭和22年に日本西洋古典学会が結成されると、きわめて顕著な研究者の数の増加と研究水準の高度化がもたらされた。当学会は、今日、会員数700名以上に達し、哲学・史学・文学および美術史・考古学を

主要分野としつつ、さまざまな専門分野から西洋古典学の進展を担う中核を形成している。西欧に遅れて始められたわが国の西洋古典学研究は、これからその最盛期を迎えようとしており、西欧の水準に伍した成果を生み出しつつあるとともに、ようやく主要な古典文献の邦訳も整備されようとしている。わが国固有の状況に呼応した仕方での確固たるギリシャ・ラテン文化の受容と理解は、いま始められようとしているところである。

今般の特定領域研究においても、西洋古典学の担うべき役割は大きい。さまざまな分野における固有の研究課題を積極的に推進するとともに、特に新たな可能性を切り開こうとする意欲的な研究テーマや、当該領域にとどまらず多様な古典学界との間で、単なる比較研究を超えた実質的成果を見込みうるようなテーマのもとでの参加を期待する。